

# 軍芸作家班と莫言の創作の関係 — 「金髪の赤ちゃん」を例に分析する

李 夢 雨

はじめに：

「作家班」とは、作家の育成を目的として設立された作家研修機構である。1950年10月、工（人）、農（民）、兵（軍人）出身の新たな作家チームを育成するために中央文研所が設立された。これが「作家班」の前身である。最初の主任は丁玲で、張天翼が副主任を担任していた。しかし1957年の反右派運動で丁玲が「丁・陳反党集団」のリーダーとされると、中央文研所も解体された<sup>1)</sup>。1978年以降改革開放の進展に伴い、文芸領域も大きく発展することになる。1979年の鄧小平の講話<sup>2)</sup> および1982年の王蒙の「作者学者化」<sup>3)</sup>の観点のもとで、多くの「作家班」があらためて設立されることとなった<sup>4)</sup>。

莫言、余華、王安憶、賈平凹、閻連科などほとんどの中国人作家が、作家班に参加した経験を持っている。莫言も二度作家班に参加した経歴がある。一回目は1984年から1986年の2年間に参加した中国人民解放軍芸術学院（以下は「軍芸」と略称する）作家班、二回目は1988年に参加した北京師範大学と魯迅文学院が連合創設した作家班である。

莫言が軍芸に入学する前までに合計13本の作品を発表し<sup>5)</sup>、これらの作品はほとんどが「革命的リアリズムと革命的ロマンチズムの両結合」の特徴を持っていた。しかし、軍芸に入学したその年の冬に執筆された代表作「透明な人蔘」では、入学前の作品とは異なる美意識や創作技法が表れた。軍芸での学習経験が莫言の美意識の確立に大きな影響を与えたと推測されるが、軍芸時代の教育経験と創作の関係についての研究はまだ十分に進んでいない。

そこで、本稿では「軍芸作家班」という教育経験が莫言の創作に与えた影響に焦点を当てる。軍芸作家班のカリキュラムと授業方法、講師と授業内容という二つの側面を通じて、莫言の創作に対する教育環境の影響を検討した上で、「金髪の赤ちゃん」という作品を分析し、その影響がどのように作品に表れているのかを明らかにする。これにより、莫言の美意識の形成過程を考察する。

## 1. 軍隊から軍芸へ

1977年、全国的に高校入試が再開されると、すでに軍隊に入隊していた莫言は解放軍鄭州工程技術学院を目標として受験準備を始めたが、結局、上官に試験を受ける枠がもうないと告げられた<sup>6)</sup>。失意の中で、莫言は新たな昇進の道を模索し始めた。当時、軍隊には省レベルの新聞や雑誌に掲載されれば功績がつくという制度があり、また『解放軍報』や『解放軍文芸報』に掲載されれば軍内で有名になり、昇進も夢ではなかった。このため、莫言は狂ったように読書をし、執筆を試み始めた<sup>7)</sup>。

何度か自分で創作を試みた後、雑誌社に投稿し始めたが、ほとんどが返されたり、返事が来なかったりした。1981年になってようやく、彼の文章が当時の『蓮池』の編集長である毛兆晃の目に留まり、1981年第5期にデビュー作「春夜雨霏霏」が掲載される<sup>8)</sup>。その後、「醜兵」、「因為孩子」、「售棉大道」、「民間音楽」も掲載され、このうち「售棉大道」は『小説月報』にも転載され、「民間音楽」は孫犁に高く評価されることとなった。こうして、莫言は文学創作の道を歩み始めた。1982年、望んでいた昇進が実現し、その後すぐに北京の本部に転属になる。1980年代には、文学創作が全国的に盛んになった。鄧小平の講話の影響を受け、軍隊総政文化部の劉白羽などの幹部たちは、これまでの作家のチームや教育制度が改革開放政策の新しい要求と合わなくなったと考えた。そこで、実際の軍隊生活を反映する作家のグループを育成するため、軍芸で文学部を設立し、さらに軍隊独自の大規模な文学誌『崑崙』を創刊することを決定する。

徐懐中によれば、総政文化部が申請書類を提出した後、軍委は1983年12月頃

に文学部の設立を承認し、1984年上半期に正式に開講するよう要求した。時間的には非常に厳しい状況であったため、当時の軍芸学長である胡可と他の学部長たちは徐懷中を文学部の主任に任命した。

莫言は同郷の知人からその情報を得て、出願の承認を上官に尋ねたところ、最終的にその要望は受け入れられた。すると、莫言は急いで列車に乗り、『蓮池』に掲載された短編小説「民間音楽」と孫犁の評価、また「售棉大道」を持ち、軍芸文学部に向かった。ところが、申請期限は既に終了しており、文学部幹事の劉毅然から、「作品はここに置いて結構です。主任は忙しいので、中に入らないでください。」と指示され、莫言は持参した作品などを机に置き、黙って部屋を出た<sup>9)</sup>。幸いなことに、主任の徐懷中がこの作品に目を留めたため、莫言は入学試験を受けることができ、第2位の成績で軍芸に入学する。莫言は様々な講演やインタビューの中で、軍芸での経験が彼の創作に与えた影響についてしばしば言及している。彼は徐懷中を恩師と呼び、徐懷中の指導に何度も感謝している<sup>10)</sup>。

莫言は軍芸に入学したその年の冬に初期の代表作「透明な人參」を執筆したが、この作品には入学前の作品と異なる美意識及び創作技法が表れている。発表前の座談会で莫言の同期学友である施放が、莫言の創作観念の変化について次のように説明した。「彼の構想は、ある思想や問題から生まれるのではなく、あるイメージから出発します。(中略) 私たちの通常のアプローチは、記事を読み、(政府の)文書を学び、(政府の)呼びかけに応じ、その後、その視点で生活を観察し、書く価値があると感じた人や出来事を見つけるというものです。なぜなら、それは中央の理念に合致し、党の要求に応え、四つの近代化の建設に寄与し、改革に役立つからです<sup>11)</sup>。」

この説明から、軍芸での学習の過程で、莫言の創作観念や美意識および技法が更新され、他人と異なる創作観念を持つようになったとわかる。「透明な人參」では従来の政治性から離れて別の芸術性を重視するようになったのである。たとえば「醜兵」、「因為孩子」などの作品は、施放の説明にもあるように、主に政治的な視点から創作され、政策の宣伝が多く見られた。ところが、「透明な人參」では、政治的な要素が抑制され、人物の内面の掘り出しや農村の生

活が工夫されて描写されている。では、軍芸での学習生活がどのように特別であり、また、どのようにしてこのような変化を彼にもたらしたのだろうか。続いて授業の形式や内容に焦点を当てながら説明する。

## 2. 軍芸の学習生活と美意識の転換

### 2.1 授業モデルと創作観念、美意識の転換

軍芸での2年間の学びは、莫言にとって文学創作の観念の問題を解決する上で重要な意義を持っていた。莫言は軍芸に入学する前、小説は現行の政治状況に適合させるべきだと考え、『林海雪原』や『紅岩』、または『野火春風闖古城』のような作品が理想的だと考えていた。しかし、1984年の冬、彼は自分の周囲で起きている些細で断片的な出来事が最も重要であることに気づく<sup>12)</sup>。この成長は、軍芸のカリキュラムと教育目的と関連している。

入学式で劉白羽は、「学生の皆さんは、軍隊の第一線からやって来て、豊富な生活経験と創作歴を持っていますが、文化大革命の影響で読書の教養や文化的な知識が不足しています。(中略)もっと速く、もっとよく創作のためのエネルギーを吸収し、蓄え、授業を聞き、本を読み、反省し、向上心を持っていきましょう<sup>13)</sup>」と述べた。

以上の発言から見れば、「軍芸作家班」の目標は当時の一般的な大学の文学系と異なっている。大学の文学部は主に文学理論や文学評論といった学術的な面が重視されるが、「軍芸作家班」は作家の文学的素養を向上させること、すなわち、知識を広げ、より洗練された創作技法や文学の素養を身につけ、最終的に優れた文学作品を創作できるようにすることを目指していた。

このような育成目的は、文化大革命前の中央文学研究所に類似している。そのため、軍芸は中央文学研究所の教育プログラムを採用し、合わせて一般的な大学の文学部のカリキュラム、例えば中国の文学史、文芸理論、創作論、歴史、哲学など人文科学の分野が幅広く取り入れられた。

一方で、授業方式は一回または数回の講座形式であり、当時としては前衛的なものだった。徐懷中によれば、この方式は「高品質な情報を強く出力するこ

と」と「知識による集中的な衝撃」が特徴であった。また、授業は主に午前に行われ、午後は自己学習や個別の創作活動、演劇やバレエ、美術展覧会の鑑賞などが行われている。

この方式では、学生たちの固定化された文学観念に素早く強烈な衝撃を与えることで、自らの個性や強みを見だし、標準的ではない「天才」へと成長することができると考えられた<sup>14)</sup>。

莫言と同じ世代の作家たちは極左の政治思想の影響を受けていたため、文学に対する理解がしばしば政治的または階級的な観点に制約されることがあった。軍芸のカリキュラムは、芸術鑑賞や創作の実践に重点が置かれたため、作家たちの芸術面の経験不足を補い、それによって彼らの美意識を更新し、創作観念を変える契機となった。苗長水は「これらの経験が私たちの思考を刺激し、文学の道をより遠くまで歩ませてくれました<sup>15)</sup>」と述べている。

莫言の創作観念の変化は、同期の学友である李存葆の作品『山間那十九座墳塋』に対する評価においてもっとも顕著に表れている。1984年、李存葆の新作『山間那十九座墳塋』の座談会で、多くの支持と肯定的な意見が寄せられる中、莫言は「この作品はまったく小説ではなく、ある種の宣伝資料に似ている<sup>16)</sup>」という批判的な意見を表明した。

莫言のこの評価を見ると、この時点で彼は小説に関して政治性や階級性ではなく芸術性に注目していることが明らかである。さらに、彼は自身の作品に対する評価についてもそれ以前とは異なる見解を持ち始めた。軍芸に入学する前に書いた「黒沙灘」は『解放軍文芸』の編集者により党内肅正の補助教材として使用されるとの提案があり、莫言は非常に光栄だと感じていたが、同級生からは「これは（ただ）政策を説明したもので、優れた小説ではない」と言われてしまう。莫言はその意見を受けいれて、次第に「真の文学、また良い文学は政治（の要求）を越えて、政治（の制約）を取り払うべきだ」との立場に変化していったのである<sup>17)</sup>。

軍芸のカリキュラムは、莫言の創作観念や美意識に大きな変化をもたらした。彼はかつての創作観念を捨て、文学作品の芸術性が最も重要な要素であるという

認識を少しずつ築いていた。しかし、莫言に与えられた影響は、単に創作観念や美意識にとどまらず、技法の面からも感じ取ることができる。次に、講師と授業内容に焦点を当て、具体的にどのような影響を受けたのかを検討してみよう。

## 2.2 講師陣容・授業内容と創作技法の向上

開学後、古典文学の呂永澤と芸術理論の冉淮舟以外の教師は、全て徐懐中が外部から募集した。

この時期講座を担当した人物として、丁玲、賀敬之、劉白羽、汪曾祺、王蒙、劉心武、張潔、李陀、張承志など著名な作家がおり、また李沢厚、劉再復、陳駿涛、張炯、劉夢溪などの著名な学者もいた。さらに袁行霈、嚴家炎、謝冕、孫紹振、洪子誠、錢理群、曹文軒などの著名な教授もいる。教師陣の専門を見ると、文学の各分野に広く及んでいると言えるだろう。

これらの教師が与えた影響について、莫言は非常に具体的に述べている。例えば、呉小如は北京大学の中国語学科の古典文学の専門家であり、杜甫、李白、荘子の「馬蹄」「秋水」などの古典文学を教えた。この講座を受けて莫言も「馬蹄」という作品を創作し、解放軍文芸賞を受賞している。さらに、「秋水」という作品を書き、この作品で初めて「高密東北郷」という文学地理的用語が登場する。莫言の小説にはよく洪水の荒れ狂う様子などが登場するが、実はこれらの情景は「秋水」という古典文学からきている。

また、葉朗が教えた中国小説美学も莫言の人物描写技法に影響を与えた。葉朗は授業で中国小説の美学的特徴を強調し、特に修辞手段である「白描」を取り上げた。この授業内容によって、莫言は「中国の古典文学または中国の（近代）文学には独自の美学的特徴がある。西洋の意識の流れの描写は長々と続き、一人の人物がひらめいたり考えたりする内容が多く書かれていたが、読み終えた後には人物像が非常に抽象的で、この人物はどんな性格の人なのか、私たちは分からない。しかし、中国の古典小説ではわずかに数語でキャラクターを生き生きと読者に表現することができる。これが白描の長所である」と気づかされた。そして彼は実際の創作について「作家は書かなくてよいものがある。例え

ば、彼が明るい人であるとか、活発な人であるとか、狡猾な人であるとかは、全く書く必要がない。彼の言葉を書き、彼が何を言ったかを書き、彼が何をしたかを書き、彼の表情を書き、彼の顔の小さな動きを書くだけで、キャラクターの心の謎をすっかり明らかにすることができる」とも述べている<sup>18)</sup>。

そして、これらの教師の中で、孫紹振は特筆すべき存在である。頼瑞雲は莫言のそれまでの発言と作品に表れる「通感」の創作技法と孫紹振の『文学創作論』での「通感論」の類似点を整理し、孫紹振が莫言の創作に与えた影響を論述した。「通感」とは、日常の経験で、視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚がしばしば相互に連携し、目、耳、舌、鼻、身体各感覚の領域が境界を越えることで<sup>19)</sup>、中国古典詩作でよく使われる修辞手法としている。孫紹振は『文学創作論』の原稿を講義で使い、『文学創作論』が発表された後、作家班の35人の学生にそれぞれ一冊ずつ贈った。また孫紹振は、『文学創作論』の改訂版で次のように述べている。「これは一般的な文学理論の著作ではなく、創作論であり、作家の創作の心理および状況を制御するための特殊な法則と技術を研究するものであり、美の本質論とも言える専門書である<sup>20)</sup>」。

孫紹振が指摘した通感について、莫言は次のように述べている。「ある人の美しい歌声が「余韻、梁をめぐり三日絶えず」という言い方がある。余韻が視覚で感じられる現象になっており、つまりこれは視覚と聴覚を融合させることである（引用者注：歌声が梁のまわりをめぐっているという、『列子』にある故事）。また、彼はある人の歌声を甘美だと形容したが、甘さは実際には味覚であり、美しさは視覚である。それは、味覚（と視覚）の言葉を使って音声を表現しているのである<sup>21)</sup>」。

そして、莫言はこの技法を作品に取り入れた。例えば「透明な人參」には主人公である黒ん子は空気中に隠れた音や、他の人が聞こえない音を聞くことができ、時には匂いを聞くことさえできるという特殊な能力を持っている。このような非日常的な表現は、孫紹振の影響を受けたものだと言える。さらに、頼瑞雲は孫紹振が『文学創作論』で述べている「交感論」、「散文・小説・詩歌感覚の区別論」、「中心感覚論」、「集約論」、「同化論」などの技法も「透明な人參」

に類似した表現を見ることができると指摘している<sup>22)</sup>。

莫言は「透明な人參」発表前の座談会で、「この小説を書く際には、すでに先生から多くの授業を聞いており、構想には苦労しませんでした。<sup>23)</sup>」と率直に語っている。このことから、「透明な人參」の誕生と軍芸での学習経験が密接に関係していることがうかがえる。少なくとも創作技法の面では、莫言は軍芸で学んだ知識を活用し始めていたのである。

総じて言えば、軍芸の授業カリキュラムは莫言により広い視野を提供し、豊かな美的経験をもち、彼の創作観念と美意識を再構築した。一方、講師が教えた知識は、彼により詳細な創作技法に関する多くの示唆をもち、この二つの要素の相互作用の結果、莫言の創作力は飛躍的に向上し、プロ作家としてスタートすることとなった。

### 3. 新たな美意識と創作技法の具体的な実践 —— 「透明な人參」の影の中に沈んだ「金髪の赤ちゃん」

これまで軍芸の学習経験と莫言の創作との関係についての先行研究では、主に経歴の整理に焦点が当てられてきた。具体的なテキスト分析は頼瑞雲の論文しか見当たらず、その論文は「透明な人參」に焦点を絞っている。しかし、「透明な人參」の一本の作品だけでは軍芸が莫言の創作に与えた影響を明らかにすることは難しい。一方、これらの創作技法の適用は「透明な人參」に限らず、「金髪の赤ちゃん」にも見られるのだが、そのことに注目した先行研究はなく、本作の研究価値は「透明な人參」の影に沈んでしまっているのが現状である。

そのため、本研究は「透明な人參」のほぼ同時期に書かれた「金髪の赤ちゃん」を取り上げ、この作品から読み取ることができる軍芸の学習内容を分析した上で、軍芸が莫言に与えた影響を補足する。また、「金髪の赤ちゃん」は「透明な人參」の後に執筆された作品として、「透明な人參」に見られる創作技法と比較することで、莫言の創作意図や手法が転換していく過程を究明し得ると考えられる。

「金髪の赤ちゃん」は1985年1月に執筆され、同年に『鐘山』の第5号に掲



載された。この作品について莫言は自ら最も気に入っている作品であり、「一般人の胸の奥に秘めた世界に入り込んでいる」と自己評価している<sup>24)</sup>。

「金髪の赤ちゃん」は、解放軍の軍人である孫天球は軍人の信仰を堅守し、人間の欲望を獐猛な獣と見なしていたが、一連の出来事を経て、ついに自身の欲望を直視し始め、若い妻に性的妄想を抱くようになる。家に帰ると、妻と隣村の赤毛の青年の浮気の実事を知るが、最終的に妻を許し、赤毛の青年を告発して刑務所に追いやる。その後、妻が妊娠していることを知り、赤ん坊が生まれると、その赤ん坊が金髪だったという事実に耐え切れず、ついには赤ん坊を絞め殺してしまう。この作品で見られる創作手法は、「透明な人參」と一部共通するものもあるが、異なるものも存在する。

### 3.1 「通感」手法の使用

「透明な人參」では、登場人物の黒ん子は健常者でありながら、聴覚を視覚に変換する不思議な能力を持っている。これが物語に神秘的な要素をもたらし、読者に非現実的な体験を提供している。つまり「通感」が非現実的な雰囲気構築する手段として使用されているのである。一方、この「通感」手法の適用は「金髪の赤ちゃん」<sup>25)</sup>でも見られる。以下は具体的な例である。

「遅出の苗は土の塊を押し上げ、その解放の歓声と敗北の歯ざしりの音が夜の声に混じり合い、一斉におばあさんの耳へと飛び込んで来る。」(186頁)

「おばあさんはまたひと寝入りしていた。目が目覚めた時には、古い牛車が坂道を登って行くように太陽がグワングワと音を立てているのが聞こえた。赤い日差しが雲に当たると、チリチリと鳴り、村の西方で鶏の鳴き声がした。」(187頁)

以上の描写は「通感」の特徴と合致しており、盲目のおばあさんを通して、夜の景色や昇る太陽などの視覚的要素が聴覚に転換されている。しかし、「金髪の赤ちゃん」では、登場人物が有する不思議な能力についての確な解釈が提示されている。盲目のおばあさんが登場する時、次のように描写されているのである。

「視覚が失われると、聴覚が非常に敏感になった。今では人が聞くことのできるあらゆる音を聞けるばかりか、人には聞こえぬ音までも聞き取ることができた。…(中略)…闇は相変わらず深く、手を伸ばせばピロートの布に触れるように触感できた。布団はほかほかとして温かく、居心地が良かった。彼女には部屋の中、庭、畑、そして天地の間にある一切のものが見えなかったが、天地に存するあらゆるものはその耳の内であった。」(185頁)

夜の景色を触覚で感じることは本来不思議なことである。しかし、盲目のおばあさん、すなわち非健常者の視点が主眼となり、視覚に制約があるという前提が示されたことから、彼女の身体の他の器官が極めて敏感に発展していると設定されている。この結果、手で夜の景色を感じ取ることが可能となるという論理的な合理性が生じる。このような方法により「金髪の赤ちゃん」では「通感」による神秘的な雰囲気「透明な人参」よりも控えめになっており、非現実感が和らげられている。

なお、この変化の原因に関しては、「透明な人参」の座談会での莫言の学友による議論の影響があると考えられる。座談会では李本深が「この作品における神秘的な雰囲気について『透明な人参』は非常に抽象的な要素が際立っています。透明感のある雰囲気を追求しており、僅かに神秘的な要素も漂っています。これに対して批判するつもりはありませんが、こうした探求が行き過ぎ、神秘的な雰囲気を演出するためにあまりにも意味不明になることは避けるべきです<sup>26)</sup>。」と論じたのである。

「金髪の赤ちゃん」を執筆する際、莫言はおそらく意図的に盲のおばあさんが不思議な能力を持っている原因を説明し、李本深が指摘した「意味不明になることを避けるべきだ」の観点を実践していると言えらる。

莫言は孫紹振の授業で「通感」手法を学び、「透明な人参」で実践し始めたが、その後軍芸の学友との交流を通じて、さらに新たな視点で「通感」手法を適用し始めたと言える。

### 3.2 キャラクター設定

「金髪の赤ちゃん」のキャラクター設定においても、軍芸が莫言の創作観念に与えた影響は顕著である。前述の通り、軍芸のカリキュラムによって、彼の芸術観念は政治性を重視することから、人の性格や内面の複雑さに焦点を当てる方向へと変化した。この創作観念の転換に関しても、「透明な人参」と「金髪の赤ちゃん」では異なるアプローチが見られる。

「透明な人参」では文化大革命を背景とするはずの農村の姿を子供の黒ん子という政治と関係ない人物の視点から描写しており、意図的に政治的な要素を弱め、物語の背景に触れないように工夫されている。一方、「金髪の赤ちゃん」では、解放軍の軍人を主人公にすることで物語が帯びる政治性をあえて強調しつつ、軍人という政治とは切り離せない要素を持った人物が最終的に殺人罪を犯すという行為を描くことによって、人間の複雑さを浮き彫りにしている。

従来の小説作品の描写では、解放軍は常に革命や人民に奉仕し、人間としての感情や欲望を抑制するイメージが一般的だった。入学前の莫言の作品でも感情や人間の欲望に対して抑制的なアプローチが見られ、特に軍人像を描写する際には、家庭を捨てて集団に奉仕するキャラクターが多く登場した。例えば、「島上の風」では、主人公は島に駐在しているために帰宅できずに離婚し、最終的には戦友を助けるために命を犠牲にする<sup>27)</sup>。また、「民間音楽」では、盲目の青年は最終的に花茉莉が彼に向ける感情から逃げ、純粋な芸術だけを求めるといふ姿勢を示している<sup>28)</sup>。

しかし、孫天球のキャラクターは従来の解放軍軍人像から脱却し、より人間的な感情を持つことが強調されている。物語の最初では、彼は性的な妄想などを革命の理念に反するものと見なしていたが、物語が進むにつれ、欲望に直面していく。特に、結末で赤ちゃんを窒息死させるという過激な行動は、孫天球が現実味のない理想化された軍人像からリアルな「人間」に立ち返ったことを示し、人間としての複雑な一面を披露した瞬間である。解放軍が赤ちゃんを殺害するという物語は、従来の奉仕的な解放軍のイメージとは異っており、否定的なイメージを与えるので、現代の中国社会では政治的な非難を浴びやすいものである。

莫言が軍芸で更新した創作観念は次のように整理できる。まず、「透明な人參」を創作した時点というのは、まだ意図的に政治的な要素を回避しつつ、作品の芸術効果を強調するという初期の段階にあたる。そこから発展し、「金髪の赤ちゃん」の執筆時点では、政治的要素を避けるのではなく、直接的に取り扱いつつ、その上で政治的宣伝のための要求を無視しながら、人物の内面を描いていると言えるだろう。

### 3.3 「多重性格複合論」の使用

「金髪の赤ちゃん」における具体的なキャラクター描写においても、莫言が軍芸で学んだ「多重性格複合論」を適用していることが見られる。莫言は劉再復に宛てた手紙で、「数十年前に軍芸を学んだ際、先生の多くの講義を聞いたことを覚えています。特に、「フラットキャラクター論」と「多重性格複合論」についての素晴らしい論述は、私の創作に深く影響を与えました<sup>29)</sup>」と述べている。

1984年から1985年、劉再復は徐懐中の招待を受けて軍芸で講義を開始したが、その同時期には『文学評論』にて「論人物性格的二元組合原理」を発表しているほか、のちに発表した「關於『人物性格二重組合原理』答問」ではキャラクターの性格描写について詳しく説明している。

劉再復は人間の行動や心理的特徴が多様で複雑なシステムを構成しており、美と醜といった極端な要素が存在することを指摘し、これらの極端な要素、二元的な気質が特定の構造で組み合わせられることを「多重性格複合」と名付け、これが優れた文学の典型であると述べている。また、劉再復はフォースターの「フラットキャラクター」と「ラウンドキャラクター」理論を参考にして、「ラウンドキャラクター」は「フラットキャラクター」よりも文学作品の要素として美的価値が高いとされ、ハムレット、賈宝玉、阿Qなどがこの気質組み合わせモデルに該当している<sup>30)</sup>と述べている。

軍芸に入学する前の莫言の作品には、「多重性格複合論」や「ラウンドキャラクター論」の使用は見当たらない。例えば「春夜雨霏霏」では「軍嫂（軍人の妻）」のイメージを描いているが、この妻は「私は愚かな女ではありません。

あなたの正しい決定を私のために変えてほしくありません。部隊があなたを必要としており、島もあなたを必要としています。<sup>31)</sup>」と考え、美しく、親孝行で賢く、夫に深い愛情を抱き、祖国のために夫と共に自己を犠牲にする覚悟があり、夫の仕事や決断に無条件で支持する姿勢を見せている。しかし、このキャラクターは常に献身的で完璧であり、内面の描写はほとんどなく、怒りや嫉妬などの人間的な感情も存在しない。劉再復が指摘したように、このキャラクターは性格の多面性がなく、あまりにも類型的人物として描かれている。

「透明な人参」では、人物の内面が深く掘り出されており、主人公の黒ん子や火事場の弟子、石工などのキャラクターがそれぞれ異なる性格を持っている。しかし、これらの性格は物語の進行に伴って変化せず、終始一貫している。このようなキャラクターはまだ劉再復が指摘した「ラウンドキャラクター論」と「多重性格複合論」に適合していない。「春夜雨霏霏」のような類型的人物は登場しなくなっているものの、「多重性格複合」にはまだ至っていない。

一方、「金髪の赤ちゃん」の紫荊は、より多面的で複雑な性格を持っている。紫荊は、親孝行で家事をこなし、夫が外で働いている間に家庭を維持し、夫の帰りを待つなど貞淑な性格を示しているが、同時に夫への怒りや不満も抱いており、夫が外に出られなくなることを望んでいる。また、不倫相手である赤毛の青年が刑務所に入った後も、彼女は青年の出所を待つことを選び、心理的にも肉体的にも夫を拒絶する。これらの複雑な性格は、従来の軍人の妻のイメージから抜け出し、自らの欲望を持っていることを示しており、劉再復が提唱した「多重性格複合論」に合致している。このように、「金髪の赤ちゃん」では、「ラウンドキャラクター」と「多重性格複合」理論が使用されていると言える。

総じて言えば、「金髪の赤ちゃん」はキャラクターの描写において、「透明な人参」よりも緻密であり、人間の複雑性の探求に重点を置いている。それにより、莫言は徐々に、類型的人物の描写を捨て、人間の複雑性に焦点を当てるようになり、キャラクターの性格がより豊かに表現されるようになった。

以上の変化は、莫言が軍芸で学んだ知識を創作観念及び創作手法における具体的な実践過程として反映していることを示唆する。「金髪の赤ちゃん」と「透

明な人參」を比較すると、莫言は創作手法の実践においてより進んでいるのである。また、登場人物の内面に迫る際に、莫言は新たな認識を得つつ、新しい手法を用いている。さらに、創作観念の変化においては、莫言はより一層自らの作品における芸術性を追求し、政治の文学に対する拘束に対してより断固とした反抗を開始した。「金髪の赤ちゃん」は彼の転換期に位置付けるべき重要な作品として「透明な人參」に引けを取らないものであると言えるだろう。

#### 4. 終わりに

2007年、山東理工大学での講演に、莫言は次のように述べていた。「一九八四年、私は解放軍芸術学院文学部に合格しまして、この学院で多くの啓発と教育を受け、次第に悟りを得たのです——実は小説は政治とそれほど密接な関係を持ってはならない、と。(中略)作家は創作の際には人物から出発し、感覚から出発して、自ら最も熟知する現実を描くべきであり、自らの心に最も大きな関心を引き起こす現実を描くべきなのです<sup>32)</sup>」。

軍芸作家班での経験は、莫言の創作観念に重要な変革をもたらした。それ以前の作品で莫言は主流の現実主義の枠組みにとどまり、作品には政治と階級の意識が強く含まれていた。莫言はこれを「革命的リアリズムと革命的ロマンチズムの両結合」と表現し、それが彼の心の中の一つの「お化け」であったと考えている<sup>33)</sup>。しかし、軍芸作家班に入学した後、彼は自分の視野を広げ、芸術的な素養を豊かにし、ますます自身の創作観念を更新し、創作技法を進化させてきた。

また、莫言の作品におけるさまざまな要素が混ざり合った芸術効果は莫言の作品の芸術効果の源を探求する際に無視できないものであり、軍芸作家班のカリキュラムから得たものだと考えられる。洪治綱は次のように指摘している。「莫言の小説の中には、美意識であれ叙述であれ、(これらのものの)調和が困難で、様々な要素が含まれており、一種の交じり合う美意識が現れている。このような交じり合う美意識が莫言の作品評価に様々な論争をもたらすと同時に、作品への研究価値ももたらした<sup>34)</sup>」。

作家を育成することができるかどうかという問題については、今でも議論が

続いている。一部の学者は作家を育成することができるという観点を支持しているが、他の学者は創作が生まれつきの才能であり、多重の感情と行動の感知から生まれるものであるため、量産化にはできないと考えている。羅常培は「大学は作家を育成しないのだ。作家は社会で育成されるものだ」と述べている<sup>35)</sup>。また、王安憶はフランスで創作の授業を開設していた女性作家にこの問題を尋ねたことがあり、その作家は創作が想像力によるものであり、作家育成に否定的な意見を持っていた。しかし、王安憶自身はこれに完全に同意していなかった。彼女は確かに教育経験から得たものが創作に反映されるケースは非常に限られているが、個人の努力という部分に貢献するものとして教育は多少の助けになる場合があると考えている<sup>36)</sup>。

この問題についてはまだ決定的な結論は得られていないが、作家の育成に対する実践は絶えず行われている。今後の研究では、他の作家たちの作家班入学前後の創作を分析し、作家班の教育が作家の育成に必要な要素であるかどうかを明らかにした上で、作家の育成の可否、その有効性や手法などを広く検討していきたいと考えている。

## 注

- 1) 邢小群『丁玲与文学研究所的興衰』(河南文芸出版社、2013年) 89頁
- 2) 鄧小平「在中国文学芸術工作者第四次代表大会上的祝詞」『鄧小平文選』(人民出版社、1983年) 179-186頁。鄧小平は文芸と政治は単純な従属関係や完全に切り離された対立関係ではないと指摘した。原文：「党对文艺工作的领导，不是发号施令，不是要求文学艺术从属于临时的、具体的、直接的政治任务，而是根据文学艺术的特征和发展规律，帮助文艺工作者获得条件来不断繁荣文学艺术事业，提高文学艺术水平，创作出无愧于我们伟大人民、伟大时代的优秀的文学艺术作品和表演艺术成果。」
- 3) 王蒙「一個值得探討的問題－談我国作家的非学者化」『讀書』(第11期、1982年) 1982年に王蒙は「作家学者化」のスローガンを提唱した。原文：「我们的作家队伍是一支很好的队伍，是一支古今中外罕见的与人民同呼吸共命运、与革命同

生死共患難の隊伍，这是没有疑問的。但是，建国三十余年来，我们的作家隊伍的平均文化水平有降低的趨勢（近年來可能略有好轉），我们的作家愈来愈非學者化，这也是事实。而且，这是一个严重的事实，如果不正視和改变这种狀況，我们的文学事業碍難得到更上一层楼的發展。」

- 4) 今まで「作家班」に関する研究は邢小群『丁玲与文学研究所の興衰』（河南文芸出版社、2013年）。また、劉業偉「新中国文学新人培養機制研究—從文学研究所到魯迅文学院」（上海大学博士論文、2015年）があり、これらは魯迅文学院（文革前は中央文学研究所と称する）に集中している。一方、葉焯「創意写作視野下的魯迅文学院新人培養研究」（『中国創意写作研究』、2015年）のようにクリエイティブ・ライティング理論から文学新人の育成の可能性について論述した。一方、2008年12月20日、西北大学は「大学教育与西北大学的作家群現象研討会」を開催し、大学教育と文学創作、現代文学のメカニズムと作家育成などについて討論が行われた。
- 5) 作品はそれぞれ「春夜雨霏霏」、「醜兵」、「雪花・雪花」、「因為孩子」、「售棉大路」、「民間音楽」、「我和羊」、「金翅鯉魚」、「放鴨」、「白鷗前導在春船」、「島上的風」、「雨中的河」、「黑沙灘」である。
- 6) 莫言「我的大学」『会唱歌的牆』（作家出版社、2012年）271頁
- 7) 葉開『莫言評伝』（河南文藝出版社、2008年）175頁
- 8) 莫言「在文学种种現象的背后——2002年12月与王堯長談」『莫言對話新録』（北京：文化芸術出版社、2009年）58頁
- 9) 前掲「在文学种种現象的背后——2002年12月与王堯長談」、6頁
- 10) 莫言・林敏潔・藤井省三「物語る人——ノーベル文学賞受賞講演」『莫言の思想と文学—世界と語る講演集』（東方書店、2015年）221頁
- 11) 徐懷中・莫言など「有追求才有特色—關於『透明的紅羅卜』的對話」『莫言研究三十年』（山東大学出版社、2013年）66頁
- 12) 前掲「在文学种种現象的背后——2002年12月与王堯長談」、65頁
- 13) 朱向前「黄金時代的文学記憶—我与首届軍芸作家班」（『解放軍芸術学院学報』、2010年第4期）11頁



## 軍芸作家班と莫言の創作の関係

- 14) 徐懷中・莫言・朱向前「不忘初心 期許可待——三十年后重回軍芸文学系座談実録」(『人民文学』、2017年第8期) 9-11頁
- 15) 苗長水・蔣昭媛「記念軍芸建院50周年の訪談」(『時代文学』、2011年5月) 68頁
- 16) 前掲「在文学种种現象的背后——2002年12月与王堯長談」、63頁
- 17) 前掲「在文学种种現象的背后——2002年12月与王堯長談」、62頁
- 18) 前掲「不忘初心 期許可待——三十年后重回軍芸文学系座談実録」、11-12頁
- 19) 錢鐘書「通感」『旧文四篇』(上海古籍出版社、1979年) 52頁
- 20) 孫紹振『文学創作論』(海峽文芸出版社、2004年) 3頁。初版は春風文芸出版社、1987年
- 21) 前掲「不忘初心 期許可待——三十年后重回軍芸文学系座談実録」、11頁
- 22) 賴瑞雲「莫言四談孫紹振一本土文論对莫言「跨界大通感」創作的影響」(『名作欣賞』、2021年第4期)
- 23) 前掲「有追求才有特色—關於『透明的紅羅卜』的對話」、65頁
- 24) 莫言・陳薇・温金梅「与莫言一席談」『莫言研究資料』(山東文芸出版社、2006年) 22頁。莫言は1985年から1986年にかけて発表された『透明な人參』、『金髮の赤ちゃん』などの中編小説作品と『白い犬のブランコ』など短編小説の中で、彼が最も気に入っているのは『金髮の赤ちゃん』だと語っている。原文:「记者: 哪篇作品你比较偏爱? 莫言:《金发婴儿》。它更像一篇小说, 深入到人的隐秘世界里。虽然好多人不喜欢, 但我个人最喜欢。」
- 25) 莫言・藤井省三訳「金髮の赤ちゃん」『透明な人參莫言珠玉集』(朝日出版社、2013年) 原文引用の部分は185から187頁までの内容である。
- 26) 前掲「有追求才有特色—關於『透明的紅羅卜』的對話」、5頁
- 27) 莫言「島上の風」(『長城』双月刊、1984年第2期)
- 28) 莫言「民間音楽」(『蓮池』、1983年第5期)
- 29) 劉再復「莫言致劉再復信(1996年元月6日)」『莫言了不起』(東方出版社、2013年) 57頁
- 30) 劉再復「關於“人物性格二重組合原理”答問」(『讀書』、1984年第11期) 50-55頁
- 31) 莫言「春夜雨霏霏」(『蓮池』、1981年第5期) 5頁

- 32) 莫言・林敏潔・藤井省三「私の文学経験」『莫言の思想と文学—中国と語る講演集』(東方書店、2016年) 279頁
- 33) 前掲「個性なくして共通性なし」『莫言の思想と文学—世界と語る講演集』、112頁
- 34) 洪治綱「論莫言小説的混雑性美学追求」(『中国現代文学研究叢刊』、2015年第8期) 31頁
- 35) 汪曾祺『人間草木』(北京時代華文書局、2017年) 186頁
- 36) 王安憶『小説与我』(広西師範大学出版社、2017年) 112頁